

都道府県等名：岡山県

目的	目標	目標値			事業実施主体ごとの達成度			交付金相当額 (円) (うち地域提案メニュー)	事後評価	
		目標値	実績	達成度	事業実施主体	目標	達成度		評価及び指導方針等	第三者の意見
I 農畜水産物の安全性の向上	農薬の適正使用等の総合的な推進	農薬の不適切な販売及び使用の発生割合 9.0%	2.7%	106%	岡山県	9.0%	106%	238,000	農薬の使用基準の遵守、安全かつ適正な使用及び保管管理については、啓発資料の作成や研修会による指導、農薬販売者に対する立入検査時の周知啓発及び改善指導を継続して実施しており、農薬の不適切な販売及び使用の発生割合についての目標を達成できている。特に令和3年度は、新型コロナウイルス感染症のため対面での指導が難しい場面も多かったが、工夫して研修会を実施できた。 そのため、これまでの指導による成果は十分に出ていると考えており、今後も農薬の使用基準の遵守、安全かつ適正な使用及び保管管理、適切な取扱いや販売の推進などの指導を継続していく。	(1) 農薬の安全使用の推進、(2) 農薬の適切な管理及び販売の推進の事業内容において、農薬販売・使用者等に対して事業が実施された。6月1日-8月31日には農薬危害防止運動を実施した。ゴルフ場の農薬指導も行っている。令和3年度はコロナの影響で制限的ではあったが、農薬危害防止対策協議会、農薬危害防止運動、啓発活動の実施等を行っており、達成度は100%を上回った。 立ち入り検査については、農薬販売所の146件を的確に行い、販売届の不備などについて指導し、改善されている。これらのことから農薬の適正使用等の改善点を指摘し、総合的な推進が達成できていると判断する。 引き続き、農薬の適正使用等の総合的な推進についてご指導いただきたい。
	海洋生物毒の監視の推進	海洋生物毒のモニタリングの総実施回数 968回	1,077回	111%	岡山県	1,077回	111%	388,000	二枚貝類（カキ・アサリ）の生産時期を中心に調査計画どおり効率的な調査が実施され、貝毒に係るリスク管理の徹底とともに、貝類の安全性の確保が図られたと考えられる。 カキ等の食用二枚貝類の毒化は、近年、全国的に多発しており、特に食の安全性の確保が求められているが、毒化の原因となるプランクトンの増殖状況は漁場の環境に大きく左右される。 このため、貝毒発生状況の監視には、きめ細やかな漁場の調査及び二枚貝の検査が最も重要となるが、本事業において実施された調査の時期、検査の手法、対象範囲及び回数等は的確、適正で、効率的な貝毒リスク管理が行われており、評価できる。 また、食中毒については、健康被害が発生する可能性があることから、迅速な情報提供と適切な注意喚起を促すとともに、漁場監視体制のより一層の充実・強化により、二枚貝類の食の安全を図っていただきたい。	
II 伝染性疾病・病害虫の発生予防・まん延防止	家畜衛生の推進	家畜衛生に係る取組の充実度 100.2	80.8	80%	岡山県	100.2	80%	4,696,250	畜産農家に対する衛生指導、調査及び検査を実施したことにより、畜産農家及び関係機関の衛生管理意識の向上が実現できた。また、積極的に農場バイオセキュリティ事業に取り組み、農場の衛生対策の向上を図り、HPAIや豚熱等の伝染性疾病の発生防止に取り組んだ。今後も衛生指導の充実を図る必要がある。 BSE対策の検証、高病原性鳥インフルエンザなどの家畜伝染病対策、牛ウイルス性下痢（以下、BVD）など伝染性疾病対策等の家畜衛生対策を総合的に推進し、県下の農場における高い衛生管理水準の維持に努めたと評価する。 特に、広島県や兵庫県内で高病原性鳥インフルエンザが発生したが、県内の疫学関連農場における迅速な封じ込め措置などまん延防止に努め、今シーズンの養鶏場での発生は認められなかったことから飼養衛生管理基準の指導効果と判断される。 また、乳用牛・肉用牛・哺育農場における飼養管理基準のポスターなどでの啓発は、口蹄疫等の海外悪性伝染病対策のみならず、生産性の阻害する伝染性疾病にも有効であり評価できる。 県の自己評価では指導した結果、BVD対策農家の清浄性等により検査件数が減少したとのことであり、効率的な検査によって高い効果が上がったものと推察する。	
					(一社)岡山県畜産協会	100.2	80%	604,000		
					おかやま酪農業協同組合	100.2	80%	1,331,750		
					岡山県養豚振興協会	100.2	80%	3,954,000		
					岡山県養鶏協会	100.2	80%	5,358,000		

<p>養殖衛生管理体制の整備</p>	<p>養殖衛生管理指導を実施した経営体数の割合 65.1%</p>	<p>65.1%</p>	<p>100%</p>	<p>岡山県</p>	<p>65.1%</p>	<p>100%</p>	<p>553,000</p>	<p>水産用医薬品の適正使用等についての継続的な指導により、医薬品使用等に対する正しい認識が養殖業者間に醸成されてきたと考えられる。</p>	<p>養殖魚類等の安全・安心な供給のためには、持続的養殖生産確保法に基づく防疫制度及び食品衛生法や医療品医療器械等法などによる養殖衛生管理体制の徹底が必須である。また、年によって異なる魚病の発生に対しては、迅速な情報収集と感染経路の特定及び疾患ごとの適正な医薬品使用が重要となる。 こうしたことを踏まえ、本事業では、法令に基づく医薬品適正使用のための養殖衛生管理指導の他、各養殖場の巡回指導調査・監視による疾病伝播防止対策や医薬品残留検査等を的確に実施されている。こうした対応により、適切な養殖衛生管理体制の整備や養殖漁業者等の医薬品使用に対する正しい認識が醸成されてきており、評価できる。 今後とも、県民への安心・安全な水産物供給のため、養殖衛生管理体制整備の一層の充実・強化を図っていただきたい。</p>
<p>病害虫の防除の推進</p>	<p>薬剤抵抗性病害虫・雑草や従来の防除対策では十分な効果が得られない病害虫・雑草等の防除体系等における作業の現状値からの向上率 133%</p> <p>薬剤抵抗性病害虫・雑草や従来の防除対策では十分な効果が得られない病害虫・雑草等の管理手法等の普及取組数 7回</p>	<p>133%</p>	<p>100%</p>	<p>岡山県</p>	<p>133%</p>	<p>100%</p>	<p>2,449,000</p>	<p>本年度は取り組んだ4品目の6病害虫において、農薬環境リスク低減技術確立のための成果が得られ、目標値の達成度は100%と適切に実施された。環境にやさしい農業を進める観点からも、今後さらに農薬散布に伴う防除が困難な薬剤抵抗性病害虫・雑草の発生などリスク低減防除技術確立のための試験研究を進める必要がある。</p>	<p>[アスパラガス斑点性病害の発生実態の解明] (令和3年~令和5年) 県の重要品目であるアスパラガスの葉の落下を引き起こす病害(褐斑病、斑点病)の主要種の特定をすなど、現場での発生実態を調べ、2年目以降の防除体系の取り組みにつなげる。令和3年は次の3点について調査を行った。(1)斑点性病害発生実態を明らかにするため発生する菌種を調べたところ、多くが褐斑病であった。(2)現地圃場での発生生態と圃場環境を調査した結果、胞子の飛散は立茎開始前から確認され、立茎開始からの防除が必要だと考えられた。また、気象及び薬剤散布から雨除け及び薬剤散布間隔を短くすることが効果的な防除法で、注意すべきポイントであることがわかった。(3)県内圃場における斑点性病害の薬剤感受性の低下が示唆された。以上の実態解明は評価できる。 [ブドウ栽培におけるアザミウマ類の総合的防除体系の確立] (令和3年度~令和5年度) 青系ブドウが茶色くなる原因としてチャノキイロアザミウマの被害がある。このアザミウマについて農薬の感受性検定を実施し、農薬抵抗性の実態と発生消長を調査した。その結果、このアザミウマはハウスの中で越冬した個体群があり、それが12月からのハウスの加温によって増殖している実態が明らかとなった。また地域個体群によって各種薬剤に対する感受性が異なることを明らかにした。一方でネギアザミウマではそのような地域間差は見られなかった。今後、越冬個体をもつ個体群の防除、化学農薬以外の防除方法の探索が期待される。 [イチゴの天敵利用栽培における微小害虫防除体系の確立] (令和元年~令和3年度) 2年目 今年、天敵(リモニカスカブリダニ、アカメガシワクダアザミウマ)を利用する際に、クラウンにブラインシュリンプ卵を散布することで、イチゴ株上の捕食性天敵であるアカメクダアザミウマ成虫の密度が高まり、アザミウマ類による被害果率を低減できると考えられた。また別の捕食性天敵のリモニカスカブリダニにおいてもブラインシュリンプ卵を与えることで、これを餌とするコナダニ類が増殖し、それを餌とするカブリダニ類が増殖してアザミ</p>

										<p>ウマ類の防除につながる仕組みを解明した。天敵への給餌が害虫防除に有効であるという点で興味深く、優れた着眼点の研究結果である。今後は、農薬等を使った慣行防除との効果の比較についても、さらなる実証が進むことを期待したい。</p> <p>[主要農作物における殺菌剤耐性菌の発生実態の解明と有効薬剤の選抜]</p> <p>[ブドウべと病]</p> <p>岡山県内の現地圃場から採集した菌株についてリーフディスク法による薬剤感受性検定を実施したところ、43 圃場中の15 圃場で耐性菌が見つかった。また薬剤の使用制限により、耐性菌の発生圃場率を低下できることがわかった。具体的には、アミスター10フロアブルの耐性菌の存在が確認され、薬剤の使用を制限したところ、耐性菌の発生圃場率が減ってきた。また、直近3年間で散布有だと、散布無と比較して、耐性菌が存在する圃場が多くなる。農薬の使用制限によって県内での耐性菌圃場率は低下し、減農薬や、使える農薬が長く使えるという利点がある。</p> <p>[マイナー作物等病害虫防除対策] (平成19年度～継続)</p> <p>今年度は、エンダイブの害虫のハスモンヨトウ防除を目的としてプレパゾンフロアブル5の薬効薬害試験を適切に行っており、マイナークロップへの農薬登録の続きを行っている点が評価できる。</p>
重要病害虫の特別防除等	対象病害虫の調査等の総回数 46回	45回	97%	岡山県	45回	97%	77,000	適正な調査が実施され、達成度も97%と概ね良好であった。今後も県内への侵入を監視するため、継続して調査を実施する必要がある。	チチュウカイミバエ・ミカンコミバエ種群、ウメ輪紋ウイルスについて適切な調査方法によって十分に侵入警戒防除をしていただいていると判断した。本年度も未検出であり問題は認められない。岡山県は、果物の代表的な生産地であり果菜類の栽培も盛んであるため、引き続きこれら特殊病害虫の侵入については十分に警戒していただきたい。	
総計・総合達成度			総合達成率 84% 総合評価 A				19,649,000			

目的	目標	目標値			事業実施主体ごとの達成度			交付金相当額 (円) (うち地域提案メニュー)	事後評価	
		目標値	実績	達成度	事業実施主体	目標	達成度		評価及び指導方針等	第三者の意見
II 伝染性疾病・病害虫の発生予防・まん延防止	家畜衛生の推進 (特別交付型交付金)	豚熱(CSF)及びアフリカ豚熱(ASF)のまん延防止	適正	達成	岡山県	豚熱(CSF)及びアフリカ豚熱(ASF)のまん延防止	達成	1,105,000	令和3年度は、2年度に引き続き水際対策強化の取組(空港及び海港における靴底消毒)を実施したことで、ASF発生を未然に防ぐことができた。また、野生いのししのサーベイランス検査を促進し、監視体制の強化により、県内野生いのししのCSF浸潤状況を継続的に把握することができ、豚熱対策への体制構築へ寄与することができた。	水際対策として、岡山桃太郎空港と水島港における貨物船乗務員の靴底消毒を徹底することは、効果的と考える。同空港は、従来から土産物の持ち込みが多い地方空港であり、国の実施する土産物検査と連携して靴底消毒をすることで、より効果ある水際対策が行うことができたと判断する。 また、豚熱・アフリカ豚熱の捕獲野生イノシシを対象とした検査は、捕獲地域を限定したため、頭数が少なかったとのことであるが、野生イノシシの生態や本県が清浄地域であり経口ワクチン散布の関係もあり、地域に限られたと推察される。 いずれにせよ、発生がないことから、疫学的な適切であると検証できる必要頭数をモニタリングしたと考えられることから効果的な監視ができていと判断する。
総計・総合達成度				総合達成度 達成 総合評価 適正				1,105,000		